

981116 (KETSURON)

## 結章 スポーツ映像の文化解釈学：

一般的フレーム・ワークの構築

## 1. 映像の視軸としてのスポーツのイメージ化の5方向

以上、本論においてスポーツ映像がイメージ化されていく五つの視軸を措定して、スポーツ映像の象徴的意味について考察してきた。各章の概要は以下の通りである。そこからスポーツが映像としてイメージ化されていく五つの方向が類型化されて示されることになると思われる。

先ず、第3章ではスポーツが喜劇化されるイメージの方向性が確認された。スポーツが映画に取り上げられるのに何故喜劇映画が多いのか、喜劇映像で見る側に一体何が伝えられ、どのようなイメージを形成するのか。これらの問いに対し、H.ロイド、B.キートン、C.チャップリンという3大喜劇王の喜劇映像（スラップスティック）を中心に解釈を行った。その際「スポーツ実践者の行為によって描かれたプレイテキストをコンテキストに応じメタ・テキストに配慮しながら解釈すること」というスポーツの解釈学の定式に準拠して、このテキスト、コンテキスト、メタ・テキストというフレームの3重構造において、サイレント喜劇俳優たちの身体技法を中心にそこに表現されている象徴性を解釈した。

特定のスポーツ事例として取り上げたゴルフの喜劇映画では、風刺され茶化されるのは、ゴルフプレイの心性、ゴルファーズ・オネスティという倫理性、形骸化したマナーやエチケットなどのノモス化した慣習である。これらの喜劇映画は当時のゴルフの価値観やプレイスタイルを記録にとどめるという記録性も有しているが、特に、道化的機能によるノモスのカオス化、および事態の本源的在り方の再確認ということが重要な視点である。これらは一重にゴルフプレイのシリアスさに帰着すると思われる。あまりの真剣さと事大主義がパロディ化され易い格好の題材なのである。しかしながら、そこにはゴルフに対する人間のままならなさや技能的な困難さが前提的な条件となっているのである。再照射された光によって、ゴルフの形骸化を脱し、本来的な楽しみ方について再考すべき視点を喜劇映画は投げかけているのである。

第4章では、第3章に対照的なものとして、理想化されるスポーツ・イメージの方向性が解釈された。ここでは、オリंपイズム概念の文献学的な検討ではなく、スポーツものの映画の中で表現されているオリंपイズムの理想的映像化の諸相に焦点が当てられている。オリंपイズムというスポーツ思想が、スポーツ映像の中で表現されることを通して一般に流布し変容しながら伝えられてきたその概念を解釈することによって、オリंपイズムとい

うスポーツ思想を改めて整理し直すことがここで試みられたことである。この映像解釈の立場として、スポーツ映像の制作者達の表現意図に迫りながら、時代・社会のコンテクストに応じ、一般的に理解されてきたオリンピック観やオリンピズムを明らかにすることによって、オリンピック関連のスポーツ事象が理想的な方向に向かってイメージ化されていくことが確認できるという立場を採用した。

この立場に依拠し、映像文化による暗黙のイデオロギー再生産装置としてのヘゲモニー性に配慮しながら分析・記述・解釈することによって、マス・メディアやハイテク・メディアを通じて映像として流通するスポーツ思想を明らかにすることができる。ここでは、スポーツ文化の解釈学的アプローチが用いられた。また、テキストを映画の中の文字やせりふなどの言語的なものに限定せずに、映像の中の仕草、身振り、行動、あるいは映像のシークエンスをもテキストと見なして解釈を進めた。

ここでの分析・記述・解釈に当たって、対象としたオリンピック・スポーツ関連の映画は IOC の公式記録映画 3 本とオリンピックに向けて走ることを中心としたスポーツ劇映画 4 本の合計 7 編である。夏季大会の 2 本の記録映画は世界的に評価の高いものである。冬季記録映画は公開されている数が少ないが、中でもビデオ化されて入手しやすく追解釈が可能な作品を選んだ。オリンピック関連の劇映画としては、政治的、経済的、社会現象的に大きな問題を抱えた時代の作品、またはその時代を時代背景として映し出す作品を選定した。つまり、制作または表現のコンテクストとして問題を明確に提示した作品に焦点を当てるように試みた。具体的には、1980 年および 1984 年のオリンピック両大会が東西冷戦という国際政治に利用され、ボイコット合戦が続いた時代を描いた作品、1976 年のモントリオール大会以来、経済的に破綻した時代のオリンピック大会の作品、勝利至上主義や商業主義の蔓延によるドーピング事件が勃発した時代を描いた作品、大衆の健康志向を反映したジョギング・ブーム時代の「走る」ことを描いた作品を解釈することに限定した。

このような作品を対象に、スポーツ映像の描かれている内容をスポーツ・イメージを理想化する方向という視点から整理してみた。そのことによって、スポーツ映像の中で表現されたオリンピズムには次のような多元性が存在することが明らかにされた。(1) 個人的完成、達成のレベル＝個人主義 individualism の次元、(2) チームや民族の賛歌＝民族主義 ethnocentrism の次元、(3) 国の名誉＝国家主義、愛国主義 nationalism, patriotism の次元、(4) 国際交流や理解、国際親善、平和＝国際主義 internationalism の次元、および(5) 普遍的

間性＝普遍的人間主義 universal humanism＝超国家主義 transnationalism の次元である。

また、上記のスポーツ映像には、理想化されるスポーツのイメージが伝説化され、神話化されて人々の記憶の深層に沈殿していく仕掛け＝装置が明確に見られた。つまり、これらのスポーツ映像には、例えば、テレビのアナウンサーの語りによる大衆へのオリンピズムという理想の語り継ぎ、大人から子どもへのオリンピックの偉業の語り継ぎ、新聞や雑誌による偉業の固定化などの映像が取り入れられていた。つまり、伝説化・神話化される構造のもとにスポーツ映像が表現されていたのである。このようにして、選手たちの成した偉業は理想的なスポーツ・イメージとして映像化され、何らかの次元のオリンピズムとして神話化され人々の意識の深層に沈殿していくような構造が仕組みられていると解釈することができた。

第5章では、フィクション軸として、夢化されるスポーツ・イメージの方向性について解釈された。ここでは、スポーツ映像によって人々がスポーツに対して抱くイメージのベクトル化の方向のうち、夢想化、夢化される方向について取り上げられた。特に、ベースボール映画の中で、1940-50年代の第1次全盛時代の作品群と1980-90年代前半の第2次全盛時代の作品群に焦点が当てられている。その中で、先ず親子の交流や世代間の交流あるいは世代間の伝承や教育などの機能を果たしていると考えられている父と息子のキャッチボールについて、その象徴論をテキスト、コンテキスト、メタ・テキストという三つの多層的準拠枠に応じて展開した。解釈した作品は、『ナチュラル』『フィールド・オブ・ドリームス』を中心に、その他5本の合計7本のベースボール映画である。

次いで、アメリカ社会の成功の夢として強固に保持され伝承されてきているアメリカン・ドリームという価値を描いていると考えられる10作品を中心的に解釈し、その象徴的表現論を展開してきた。そうして、ナショナル・レベル、市民レベル、家族のレベル、および個人のプレーヤーのレベルのアメリカン・ドリームを区別することができた。このような夢は、所有的 to have なドリームと存在的 to be なドリームとに区別することができた。これらのアメリカン・ドリームは、スポーツ映像という文化装置によって一つのアメリカ的スポーツ・イメージとして再生産される構造を備えていた。このようにして、ベースボール映画の持つヘゲモニー性としてのスポーツ・イメージの夢想化・夢化の方向性を明らかにすることができたのである。

第6章では、第5章の対称軸として何らかの形で目的化されるスポーツ・イメージについて解釈された。ここではスポーツ映像において表現されている「何のためにスポーツす

るのか」というスポーツをする目的に焦点を当てて分析・記述・解釈が進められた。先ず、(1)『炎のランナー Chariots of Fire』と『長距離走者の孤独 Loneliness of the Long Distance Runner』という作品において、社会的関与の面から「何のために走るのか」ということについて検討した。上流階級のスポーツする目的と労働者階級の目的の差にも着目して解釈を行った。次いで、(2)「何のために勝とうとするのか」という視座から『フィニッシュ・ライン Finish Line』を解釈して勝利至上主義社会の存在とテレビ社会の権力性を明るみに出した。(3)「何のために闘うのか」という視点から『ロンリー・ウェイ Running Brave』『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』を取り上げ、反人種差別へのスポーツを通じた闘いという目的を明らかにした。続いて、(4)「何のために復活するのか」という点から『マイ・ライバル Personal Best』を取り上げ、自己のベストを尽くすことによって自己確認するという目的の存在を確認した。

以上のように多様なスポーツをする目的の存在を確認した後、スポーツをする目的の形而上学的な視点から解釈が行われた。スポーツを通じたアイデンティティの確認やスポーツにおける自己の存在証明を追求するスポーツ映像として、『ロンリー・ウェイ Running Brave』および『マイ・ライバル Personal Best』を取り上げて解釈した。これによって、スポーツする目的の深層への視座が得られたといえる。しかしながら、一方で人間のスポーツ行動には何らかの目的や理由があるという自明性も疑ってみる必要がある。『フォレスト・ガンプ：一期一会 Forrest Gump』を参照することによって、このスポーツする目的が必ず存在するという自明性に対して批判的検討も行った。

このようなテキストおよびコンテキスト解釈の他に、スポーツのドラマ映画としてのメタ・テキストを整理し、「これはドラマであって本当の話ではない」というメッセージに対し「この中の話は本当に実際にあった話ではないのだろうか」と自己確認するという認識の枠組みを構成すること、翻ってそのことによって、スポーツの肯定的・否定的なイメージが形成・強化されることにも通ずることを確認した。

第7章では、以上の水平軸と垂直軸という二つの対照軸間の対比性に関わらず、映画の中のスポーツがイメージとして記録化されていく方向性について解釈を展開した。ここでは、スポーツ・イメージが映像記録として固定化され、人々の記憶にとどまるのみならず、芸術的な表現形式を獲得していく方向についても検討を加えた。特に、近代オリンピック競技大会に焦点を当て、その記録化の方向にどのようなものが表現され、スポーツ・イメージを人々に伝えるか検討した。ここでは、オリンピック競技大会が IOC の公式記録映

画として制作されるように規則化された 1936 年第 11 回ベルリン・オリンピック大会の公式記録映画である『オリンピア Olympia』および戦後の IOC 公式記録映画として芸術的評価の高い 1964 年第 18 回東京オリンピック大会の公式記録映画である『東京オリンピック Tokyo Olympiad』が解釈の対象とされた。

まずドキュメンタリーとしての記録性、映画の芸術的表現性、それに政治的表現性であるプロパガンダという三つの概念を確認した上で、『オリンピア』と『東京オリンピック』の両作品の分析・記述・解釈を行った。

『オリンピア』においては、ドキュメンタリー映像記録の場合の 3 重のフレーム・ワークを確認し、芸術的記録と政治的なプロパガンダの軌轢を確認した。リーフェンシュタールの『オリンピア』2 部作はナチスのプロパガンダであり、強者の美学であるという批判を受けている。女史のノンポリぶりも批判されている。その一方で、その肉体映像表現自体が如何ように解釈されようとも、その映像文化が今日に伝えようとしたオリンピックの理念やスポーツそのものの魅力は、芸術形式的に見ても優れたものがある。後撮りや挿入を加えることによって、女史が表現しようとしたことは、民族の平和と友好のもとに実施されることを理想とするオリンピックの理念であり、スポーツの本質的意味であった。しかし、女史は強者や勝者の身体美に偏向しすぎたきらいもある。オープニングのモンタージュに見られるように、この映像の背後のナチズムや美的構成至上主義などへの批判は確かに重要である。しかし、それだけでは一面的な解釈に陥り、スポーツ映像そのものの表現を見落とすことになりかねない。こうして、『オリンピア』の場合には、オリンピズムの記録化とともに、強者の身体的美学の方向にスポーツ・イメージが記録化されていることが明らかになった。

『東京オリンピック』では上記のフレーム・ワークに関連してさらに特殊な認識フレームを検討した。そのことによって、これは単なる競技の記録映画ではなく、芸術的な競技の記録映画であること、および、特にオリンピックの理念であるオリンピズムの超国家主義 transnationalism という普遍的な価値の芸術的な記録化が志向されたことが確認された。

『東京オリンピック』に対する「芸術か記録か」という形をとった論争は単に表層的な論議にすぎない。そこからもう一步深いレベルの解釈に立ち入ることが必要であった。記録性に執着する立場の中心的な意図は、国威発揚や PR というプロパガンダでもある。これはある意味で国家主義 nationalism の記録を目指すことになる。オリンピック運動の目標は国際主義 internationalism に基づいて平和な世界の実現に寄与することである。オリンピズ

ムというものは本来は人間の尊厳を守った上で平和な社会を実現するという思想であり、全人的な完成という人間の普遍性に基づいた人生哲学でもある。これは国家というナショナルな視点を超えた超国家主義 transnationalism の思想であるといえる。市川崑監督はこの作品によって国家主義ではなく超国家主義のレベルのオリンピズムの理念を、選手達や観客、審判や役員などの普遍的な人間性を描き出すことによって芸術的に記録しようとした。この映画で捉えられた映像シンボルはこの超国家主義に基づいた世界平和と友愛および平等な人間性の記録であったのである。

このようなオリンピックの公式記録映画に見るように、オリンピックなどのトップ・レベルのスポーツの映像記録は記録化され固定化され、人々の記憶にとどめられて伝えられていくという構造を有することが明らかにされた。

以上、各章のスポーツ・イメージ化の五つ方向性を措定して、第3章から第7章にわたってその象徴性の解釈を行ってきたが、図 8-1 はその類型化を図示したものである。

図 8-1. スポーツ映像におけるスポーツのイメージ化の五つの方向(p.298)

この図で示したように、先ず、喜劇化 — 理想化という対比軸が構成できる。これはスポーツ・イメージが喜劇の中で道化の機能によって軽妙的・カオス化される方向と、その逆に、オリンピズムなどのように重厚的・神聖化・コスモス化される方向の対照軸を構成する。次いで、夢化(非現実化) — 目的化(現実化)という対比軸が構成できる。ここでは、スポーツ映像におけるアメリカン・ドリームの実現にみられるように夢の実現やファンタジー系のスポーツ・イメージと、「何のためにスポーツをするのか」というようなシリアスなスポーツ・ドラマ系のイメージとの対照軸として付置される。最後に、記録化 — <口承伝承化：頌歌、賛歌> (可能性としての) という軸が構成される。これは、映像の記録化(映像化)＝ドキュメンタリー と、記録には残らないが可能性としての口承伝承化(頌歌、賛歌)によるスポーツ・イメージの記録化・伝承化・神話化という対照軸である。この口承伝承としての記録の方向性は映像記録ではないため、本研究では除外された。このような類型化によって、非現実—現実というフィクション—ノンフィクションという事実軸の揺らぎに、軽妙性—重厚性というカオス化—コスモス化という垂直軸の重みが変わり、それに伝承性と神話性という記録化の方向を取る力学によってスポーツ・イメージがスポーツ映像の中で類型化されることが明らかになった。また、そこではスポーツ映像という

表現形式が「スポーツとは何か」ということに対するイメージを形成・強化する力を有していることが確認された。

これは「スポーツとは何か」という問いに対する取りあえずの回答のベクトルでもある。つまり、「スポーツとは何か」という問いに対する人間のイメージの構想力に基づいた映像によるスポーツのイメージ化の五つの方向性が整理立てられたといってもよいと考える。

## 2. 映画という形式の中のスポーツ解釈の一般的フレーム・ワークの構造(p.299)

以上の五つのスポーツのイメージ化の方向性で確認された各ベクトルの中でのフレーム・ワークは、全体としてのスポーツ映像の文化解釈学のフレーム・ワークとして纏め上げることが可能になる。図 8-2 はその統一的なフレーム・ワークを図示したものである。

### 図 8-2 スポーツ映像の文化解釈学：一般的フレーム・ワークの構築

これは既に各章で援用してきたスポーツ解釈学の定式、つまり「スポーツ映像の中で、スポーツ実践者の行為によって描かれたプレイテキストをコンテキストに応じメタ・テキストに配慮しながら解釈すること」という定式における、テキスト、コンテキスト、メタ・テキストという多層的準拠枠の共通的な統合化である。各スポーツ映像は、その物語展開と映像形式によってテキスト化できる。そのテキストには、ストーリー、行動テキスト、会話やナレーション、スーパー・インポーズなど画面上の視覚映像イメージと音声上のイメージのすべてが動員可能である。そのテキスト理解に幅を持たせるためにはコンテキストに依存しなければならない。そのコンテキストにはさらに3種のを区別して解釈に役立てることができる。コンテキスト①はそのスポーツ映像の物語展開によって表現されている時代の社会的・文化的な状況である。これに配慮することによってこの枠組みでは、映像の中のスポーツ世界、その時代の歴史伝統が窺い知れる。コンテキスト②はスポーツ映像が制作されたその時代の社会的・文化的状況である。そのようなスポーツ映像が制作され発信される際の時代のムードや思想がそこには反映されているのである。この枠組みに配慮することによって、制作の必然性や問題意識が確認できるはずである。この両者のコンテキストはそれぞれ異時代を構成し、連続性と断絶性を持ち合わせていることになる。さらに、それらのスポーツ映像はその時代のスポーツを記録し人々の思想を固定化し



て保存してきている。それを時代を下って解釈する際にはコンテキスト③に配慮する必要がある。つまり、今日的なスポーツ状況から、あるいは今日的なスポーツの価値観から過去のスポーツ映像を解釈するという離隔性が自覚されなければならない。スポーツ映像の中に埋没して参入的な解釈をするだけでは主観的な解釈に陥る危険性があるため、この距離を置いた解釈の姿勢は解釈に幅を持たせるためには必要な視座である。

さらに、スポーツ映像の解釈に幅だけでなく深みをもたらす「厚い記述」を可能にするためには、メタ・テキストへの配慮が必要である。このメタ・テキストについては第2章の方法論的検討において詳述したが、スポーツ映像に関する解釈では3種のメタ・テキストを区別しておくことが肝要である。映画のジャンル論では「スポーツ映画」というものは分節されていないが、描かれている主たる内容によって「スポーツもの」という区別が可能である。そのことによって、一般的にあって、この映画で描かれているものは「たかがスポーツにすぎない」という価値判断を含んだ認識のフレーム・ワークが構成される。しかし、否定の自己言及のパラドックスから再帰的な自己確認の働きによって「されどスポーツ」という見直しのドライブがかかる。こうして、スポーツ映像に対するメタ・テキスト①が構成されることになる。このメタ・テキスト①に配慮することによって「この映画の中で描かれていることはスポーツに関することであって遊びにすぎないが…」という形で再考を誘発することになる。これが深い解釈のきっかけとなるのである。同様に、一般的にみて「これはたかが映画にすぎない」という認識のフレーム・ワークが構成されやすい。これがメタ・テキスト②となる。しかしながら、制作者サイドにとっては「たかが映画といわれようとも芸術的な作品を創り出そうとする」という自己確認の契機が働く。それを解釈者が自覚して解釈することによって「単なる特定のジャンルのスポーツ映像だけでなく芸術作品として創作・構成・表現されている」という認識のフレーム・ワークを構成することができる。こうして深い記述へのきっかけが可能となる。最後に、スポーツ映像の鑑賞者にとってのメタ・テキスト③が区別できる。鑑賞者は単に「この中の映像は特定のジャンルのスポーツに関わる人間を描いているにすぎない」という認識の枠組みを構成するかも知れない。しかしながら、単にそのように漠然と「みる」だけではなく大きく目を見開いてよく「観る」ことによって、そのスポーツ映像の中に描かれているスポーツ・イメージのジャンルに応じて「何らかの映像として再認識しスポーツ・イメージを形成する」という働きが存在する。このような構成契機に配慮することによって、また別の深い記述と解釈が可能になる。

以上のようにして、3重のフレーム・ワークとその内部の3種のコンテキストおよび「厚い記述」のための3種のメタ・テキストが整理づけられる。これらの認識の準拠枠に応じて、第2章で方法論的に検討してきた文化解釈学という帰属と離隔という解釈学的な関係が確認できることになる。つまり、スポーツ映像へと参入した帰属的な解釈と、スポーツ映像に距離を保った離隔的な解釈という解釈学的な緊張関係が現出することになる（ガダマー、1977, p.198）。単なるスポーツ映像への没入的な観賞だけでは幅広く深い記述や解釈は達成できないのである。

このスポーツ映像の文化解釈学のフレーム・ワークは別の問題圏の方法的有効性を有していないかどうか確認することも意義深いと思われる。例えば、メディア・スポーツ現象一般、特にテレビ・スポーツの象徴的意味論の分析・記述・解釈への可能性は予感できそうである。テキスト、コンテキスト、メタ・テキストという3重の枠組みと各3種の内部の枠組みはそのままメディア・スポーツ現象の解釈のフレーム・ワークとして充当できそうな様相である。この点については補章においてスペクタクル論の可能性と合わせて検討されることになる。さらに、この3重の準拠枠は、スポーツ事象一般の解釈のフレーム・ワークとしても適用の広がりをも有する。その際には映画ということは何らかのテキストに置換する必要がある。例えば、新聞、テレビなど、あるいは「たかがスポーツ、されどスポーツ」のパラドックスとして押さえる必要がある。スポーツ事象、あるいはスポーツ現実を人間の行動で書かれたテキストと見なすこと、そのテキストを時代的・社会的・文化的コンテキストで意味づけること、さらに、そのテキストの意味の深層や奥底にあるものを解釈するための「厚い記述」としてメタ・テキストに着目すること。そして、ようやくスポーツ一般事象のダイナミックな読み取りをソフト・データの読み取りへと志向しながら可能にすることができる。ただし、この際には内部の各3種の枠組みは再構成されなければならないことはいうまでもない。

このようにスポーツ映像の文化解釈学の方法論とスポーツ現実の解釈との関係性からみれば、次なる課題は、スポーツ映像から読み取られて解釈された結果と現実のスポーツ状況（事象）との関係分析の必要性である。つまり、映像文化の領域で解釈されたこととそれが現実ではどうなっているのかということとの突き合わせが必要であるということである。これは、飽くことなく解釈を継続するという意味での「解釈学的循環」という解釈学特有の学問的姿勢でもあるのである（ガダマー、1977, pp.195-196）。

### 3. スポーツ映像文化のスポーツ文化論的寄与

本研究では、既に序章で予備的に考察してきたように、スポーツ文化の複合的、総合的な関係性にいかにスポーツ映像文化というものが関与するかを明らかにすることも、スポーツ学の研究上に何らかの寄与を成すものとなるという立場をとってきた。それは、スポーツが映像として固定化され、映写され、何らかのイメージを流布し再生産していくその様相を解釈していくことによって、スポーツ文化概念の再生産に関与せざるを得ないという視点に通ずる。そのため、スポーツ文化の文化構造論でいう精神文化、身体文化、社会文化という3側面についての検討が有用なものとなると考えられた。なかでも、スポーツ映像の文化解釈学的な分析は、佐藤(1992)のいう感性的契機への寄与、あるいは寒川(1991)のいう精神文化側面に寄与することが容易に予想された。しかし、スポーツ映像文化というものがスポーツ文化の再生産に向けて関与する側面はそれだけにどどまらない。

今福(1997)は、スポーツ映像というものをスポーツ・イデオロギーと身体観を見事に映像化するものとして捉えている。彼によれば、「スポーツする健全な身体というイデオロギー」は全体主義的な国家のイデオロギー装置であったとされる(pp.145-146)。例えば、ナチス・ドイツの身体観は1936年ベルリン・オリンピック大会において規律化された身体、組織化された身体として構成されたが、それは『民族の祭典』(1938)において見事なまでに映像化されていると言っている(p.145)。これはスポーツ映像をまさに国家を映し出すイデオロギー装置として見なす立場であるといえ、それは精神文化側面のみで表現されているのではないのである。そのような身体観は既に社会制度化された身体像であるともいえるのである。

また、多木(1989)は「身体の政治学」を展開して権力と文化の関係を解いている。そして、ナチスのベルリン・オリンピック大会の政治的利用について「文化から権力を実現するテクノロジーを提供されるという事態」(p.132)にいたるものとしてスポーツという仕掛け(テクノロジー)を見るのである。また身体の政治性が表象された事象の好例としてレニ・リーフェンシュタールの『オリンピア』を捉え直してもいる(多木, 1995, pp.69-77)。多木(1989)によれば、身体の政治学としてのスポーツというものは、「記号のゲームとしてのスポーツ」(p.126)として措定される。しかもそれは、3重に重層した記号の場を形成するとされる：(1)社会的言説の場(社会化された多量な言説が投入される場)；メタ・レベルで消費される傾向がある、(2)スポーツの進行そのものが情報の中で

成立しているもの（情報の密度がきわめて濃厚な場）；何が可能であるか知ること、そして(3)アルカイックな層（古層の神話）；儀礼的な要素、民族的な起源、あるいは古層の破壊である。多木は、このような多重化した記号の場であるスポーツは身体を媒介することによって神話化と対象化という二つの側面を生み出すことにつながると指摘する（多木, 1989, pp.126-128）。こうして、効率第一の理想化される幻想的身体と、科学主義と称される身体の実体的な理想化という幻想的な機械としての身体観が醸成されると多木は言うのである。「こうした記号のゲームを遂行するのが身体であり、スポーツの社会的言説は結局、すべて身体観を暗黙に含み、同時にスポーツの身体は言説から切り離されない関係にある。…（中略）…こうしてスポーツという多重の記号の場は身体に作用して、その神話化と対象化というふたつの側面を生み出した。」（多木, 1989, p.128）

多木のこのような立場によれば、スポーツ映像によるスポーツ・イメージの再生産も言説化される記号であるということになる。そこには身体が媒介される。それは便宜的に身体文化側面に分節化された言説化ではない。スポーツ文化複合としての文化の3側面が既に相互作用的に、また総合的に関与しあったスポーツの言説化なのである。このように、スポーツ映像として記録され映し出されるのはスポーツする人間の表象である。そうすると、スポーツ映像文化論は「文化としてスポーツする身体をいかに映し出して描き、記録化しているか」という視点から解釈を深めることも可能となる。つまり、スポーツという文化装置に対して身体映像を中心としながら、しかも上述の3側面からスポーツ・イメージの再生産の様態を明らかにする必要性が示唆されるのである。スポーツ映像は映し出される選手達の身体パフォーマンスが解釈の中心的な位置を占めることになるが、しかしそれは身体文化側面に限るものではないのである。

上記のような立場を整理すると、スポーツ映像文化は総合的な解釈が求められることになろう。まず、身体的・技術的側面では、映し出されたスポーツ映像の中で構成された身体、あるいはそこに見られる身体の政治技術化または規律化された身体などへの解釈の次元である。第2に精神的（知的・感性的）側面では、倫理的あるいは美的側面や人生哲学的な生き方等の価値観が映し出されていると考えられる。例えば、フェアプレー、オリンピックムあるいはプレーの美学等はその表現の一部であると考えられる。第3に社会文化的側面として、スポーツ映像に映し出される時代のスポーツ文化のイデオロギー性や、そのスポーツ体制あるいはルール等が考えられる。それは当該スポーツが置かれている時代的・社会的コンテクスト内の文化の在りようであり、そのスポーツの組織性、国家性、民族

性(ナショナリズム・ローカリズム)などの文化のイデオロギー性の表現でもある。また、そこに記録された身体の視点はすでに社会的文化側面と精神文化側面を反映せざるを得ないものなのである。スポーツ映像文化の解釈に当たってはこのような総合的な視点が要求されることになる。

スポーツ映像文化は、このようにスポーツ文化の3側面を記録化し保存し、映し出すものであるが、特にスポーツ映像ジャンルを通してスポーツ文化へのイメージの固定化・再生産という事態が本論文で明らかにしてきたスポーツ文化論への射程である。それは、スポーツ映像によって描かれた主人公達の身体文化側面、つまり身体的パフォーマンスや行動がテキスト化されることから始まり、それが支持される社会的・時代的コンテクストに応じて、社会文化側面が記録され表現されているのである。そのような身体的、社会的文化側面は、当然のことながら精神文化側面によって裏付けられているのであり、特にそのような精神文化側面がスポーツ映像による価値観やイデオロギーの流布や再生産の主たる対象であるともいえるのであるが、三つの文化側面の総合的な関与性の象徴論的な理解こそ重要な視点である。

#### 4. メディア・リテラシーの必要な情報社会に向けて

先行研究で見てきたように、スポーツを主たる題材にした映画は相当数に上る。オリンピックの公式記録映画もビデオで入手可能である。このようなスポーツ映像では単に登場人物の人生ドラマが描写されているだけでなく、スポーツの様々な問題群が映し出されている。このような映画を理解するに当たって、本論文でも指摘してきたスポーツ解釈学の定式に従い、主題をストーリーの展開上で把握することだけでなく、そのような問題群が生じる時代背景や社会状況をコンテクストとして把握して、スポーツ映像の主題理解に迫らなくてはならない。それは、時代や社会と切り離されてスポーツ文化が存在しているわけではないからである。このようなスポーツ文化理解に向けた指導は従来から当然のことのように行われてきている。ここでは、さらに「厚い記述」と解釈のためにメタ・テキストに配慮することが必要となる。

「観るスポーツ」、特にメディア・スポーツという形で鑑賞者が映画やテレビのようなメディアを介して間接的にスポーツを観戦して享受する場合には、スポーツ事象そのものの主体的な選択的な知覚－認識ではなく、既に誰かの選択的な知覚－認識によってスポー

スポーツ現実が切り取られたものを「観る」という構造になっていることに注意しなければならない。これはテレビの場合でも映画の場合でもいえることである。つまり、カメラマンやディレクター、監督といった映像の制作者達の目を介していること、そのことによって制作サイドの意図の存在によってフィルターがかけられ、スポーツ現実が構成されていることに注意が払われなくてはならない。「メディアによる現実の構成」という事態である。また、編集によって意図的な創作が組み込まれている場合もある。「観るスポーツ」は我々「観る人」の他に「みせる人」が介在して「観せられるもの」が立ち現れてくるという構造になっている。そのことを自覚することによってスポーツ映像のメタ・テキストに配慮することができる。それが、スポーツ映像のジャンルのイメージ化のベクトルを形成していたこと、およびスポーツ映像解釈のフレーム・ワークとして統合的に整理できたことは既に見てきたとおりである。ここでは、それをメディア・リテラシーという形で教育的に配慮する方向性を確認して、今後の課題の一つとして確認しておきたい。

上述したように「みせる人」の介在によって「観せられるもの」が構成されているということを知覚することは、既にメディア・リテラシーというものへの志向である。鈴木(1997)によればメディア・リテラシーとは「メディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションをつくりだす力」(p.8)であるとされる。これは、メディアによる単なる情報の受け手としての視聴者 audience から情報の読み手としてのクリティックス critics へと立場を変えられる力を身につけることである。そのような立場は基本的に「メディアは現実を構成する」という自覚を伴うことが特徴的である。そのため、メディアから意味を読み取り、制作者達のイデオロギーや価値観を峻別し、社会的な意味を読み取るが必要となる。スポーツへの価値観やイメージもメディアによって暗黙の内に形成されているからである(舩本, 1997)。

このような事態に対して自覚的であるためには、スポーツ競技の中継を観ても、その際に介在者のイメージの構成力を観て取り、単なる受け手として「感動した」という一語で全ての観戦体験を済ませないような力が必要となる。なぜならば、「感動した」という一言が全ての批評を隠蔽するからである。メディアによるスポーツ映像体験において、この「感動」という表現は、観たこと、知ったこと、疑問に思ったこと、共感したこと、分析したことが霧散し、観る目を放棄することになるからである。報道側は常にテレビなどのメディアを通してスポーツの「感動」を茶の間に届けようとする。そこではスポーツ競技の過程ではなく結果に対する最終的な印象を視聴者に強要することになる。そこに至るま

での過程、歴史性や文化性、哲学や科学的な裏付けなどの紹介を捨象してしまい、多面的な報道を放棄し手抜きの記事をしてしまいかねない。しかし、ここで「一体誰がその感動を求めているのか？」と問う必要があることも事実である。我々視聴者こそがスポーツ映像に対して「みて面白いもの」「みて興奮するもの」を要求し、報道側の「感動」の押し売りを容認している張本人に他ならないという構造が伏在しているからである。

## 5. 今後の課題及び展望

スポーツ映像の文化解釈学として一つの結論まで至ることができたが、まだまだ研究上の課題は山積している。本研究の今後の課題として、先ず第1に、膨大な数にのぼるスポーツものの映画をさらに引き続いて分析・記述・解釈をしていくことがあげられる。特に、今回はあまり言及できなかった暴力論および人種・文化・性などの差別問題などに対して、スポーツ映像からのアプローチも必要となると思われる。

第2に、スポーツ映像の文化解釈学の方法論とスポーツ現実の解釈との関係性からみれば、スポーツ映像から読み取られて解釈された結果と現実のスポーツ事象との関係性の分析が次の大きな課題として残されている。

第3として、メディア・リテラシーが重要となる情報社会に向けて、スポーツ映像文化を批判的に継承していくための「観る」「読む」「創る」という能力を開発していくために、スポーツ映像の教育的な活用方法を検討する必要性が課題として示唆された。つまり、これからのスポーツ映像を用いた教育ではメディア・リテラシーの指導によって、「見る」のみならず「観る」ことによって「読む」姿勢を作り上げることが重要である。さらに、スポーツの問題群に対する意識を深化させるために、例えば、発表用ビデオを編集して「創る」という授業実践等を取り入れることによって、映像の「作り手の視覚」を確認することが可能になるとと思われる。これは「メディアによる現実の構成」という事態を実感的に理解させるための有効な方法となるように思われる。

さらに第4として、本研究で得られたフレーム・ワークと文化解釈学の方法をテレビ放映によるスポーツ・イメージ形成の力学解明に向けて活用していくことがあげられる。このような耐えざる解釈学的な試みが繰り返されることによって、メディア・リテラシーへの導入が可能となり、スポーツ文化の批判的継承が実現されていくことになるとと思われる。

## 文献 References

ガダマー(池上哲司・山本幾生訳)(1977)真理と方法. O. ベゲラー(編)(瀬島 豊他訳)解釈学の根本問題(第6刷). 晃洋書房:京都, pp.171-227(1984年版, 第1刷1977). <Gadamer, Hans-Georg(1960) Wahrheit und Methode. Tübingen, S.256-269, S.275-295.>

今福龍太(1997)スポーツの汀. 紀伊國屋書店:東京, p.145.

舛本直文(1997)スポーツ映像のイメージ形成・強化装置としての機能:『炎のランナー』を事例として. スポーツ教育学研究 17-2:85-94.

佐藤臣彦(1992)体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察. 体育原理研究 22:1-12.

寒川恒夫(編)(1991)スポーツ文化複合. 体育の科学 41-2:139-145.

鈴木みどり(編)(1997)メディア・リテラシーを学ぶ人のために. 世界思想社:京都.

多木浩二(1989)権力と文化. 宇沢弘文・河合隼雄・藤沢令夫・渡辺 慧(編)岩波講座 転換期における人間 第10巻. 岩波書店:東京, pp.115-145.

多木浩二(1995)スポーツを考える — 身体・資本・ナショナリズム. 筑摩書房:東京.



981116 (KETSURONZU)

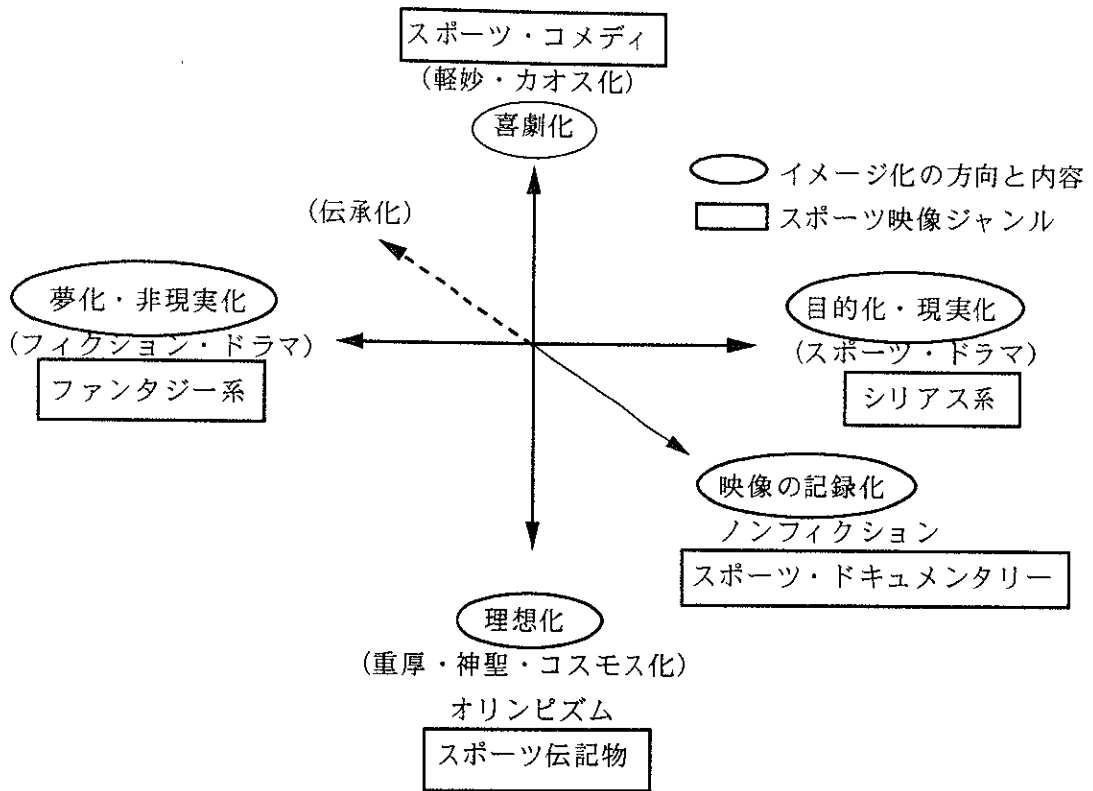


図 8-1. スポーツ映像におけるスポーツのイメージ化の五つの方向

981116 (KETSURONZU)

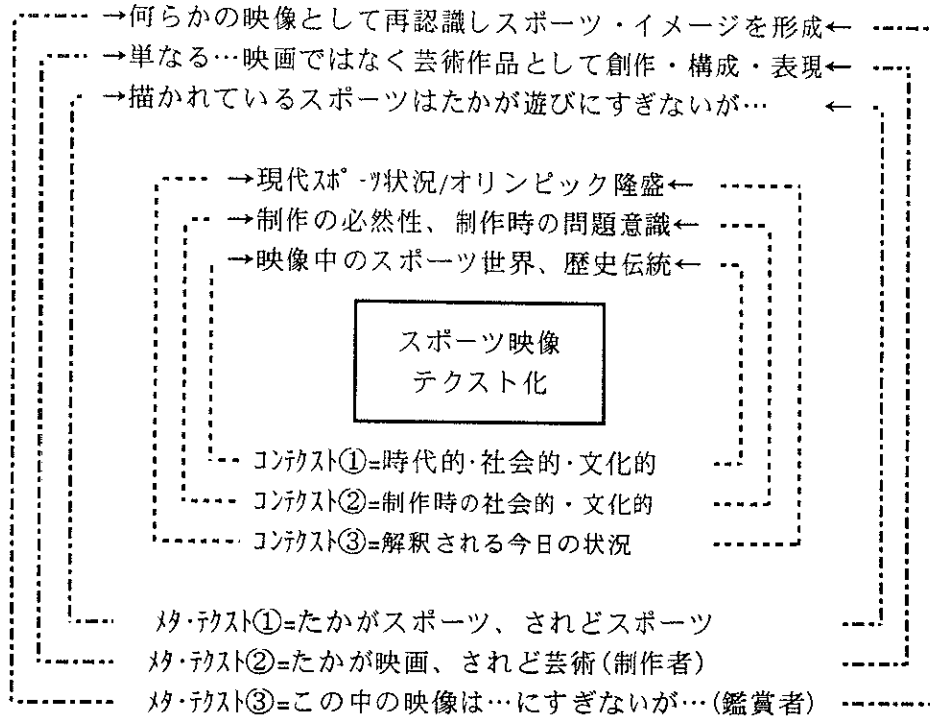


図 8-2 スポーツ映像の文化解釈学：一般的フレーム・ワーク